

氏名(本籍)	丁 <sup>ちよん</sup> 賢 <sup>ひよ</sup> 芽 <sup>な</sup> (韓国)
学位の種類	博士(社会学)
学位記番号	博甲第1,184号
学位授与年月日	平成6年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	社会科学研究科
学位論文題目	家族における子産み・子育てによる親の社会化 —子育て期の女性と男性における産育に関する意識調査を通じて—
主査	筑波大学教授 副田 義也
副査	筑波大学講師 樽川 典子
副査	筑波大学講師 黄 順 姫

## 論 文 の 要 旨

本論文の目的は、社会化を生涯にわたる相互作用の過程と位置づけ、子産み・子育て期の男女に焦点をあてて、親の社会化を理論的かつ実証的に解明することにある。おとなの社会化を、生涯発達の見点から考察する視点は、高齢化の進展とともに重要な課題として関心をよせられてきたが、ライフコース研究などでわずかな例外があるのみであり、本格的な研究はその端についたばかりである。本論文は、その先駆的な一つである。

本論文は、第1章～4章、要約と展望から構成されている。

第1章「子どもの社会化から大人の社会化研究へ」では、既存研究の問題点を指摘し、社会化の概念の検討がおこなわれている。戦後日本の社会学者たちはT. パーソンズの構造機能主義アプローチ、E. エリクソンの発達アプローチに依拠して社会化研究をおこなってきた。しかし、ライフサイクル全体にわたる過程として社会化を検討する必要性は指摘されながらも、概念のあいまいさ、社会化の対象を子どもに限定する傾向、社会化がもつ機能的要件という性格の過度な強調という問題がみいだされる。そこで筆者は、基本概念としてE. エリクソンの社会化の相互性を選び、日本の社会学者たちの諸説を参考にしつつ、家族におけるおとなの社会化を分析する枠組の提示を試みている。それは、親子を対等に位置づける枠組みであり、双方向的な相互作用の過程を社会化としてとらえる。この過程において、親は育児をしながら子どもによって自らも成熟する存在であり、その内容は親の意識、行動、価値の全体を含む。やや具体的にいえば、親の役割や子産み・子育ての行為に対する解釈、親としてのアイデンティティやパーソナリティの形成、子育てネットワークでの相互作用、子育て技術の習得が、家族におけるおとなの社会化として検討されるべき課題になる。

第2章「出生行動および育児行動を通じての親の社会化」は、おとなの社会化と、子どもや子育て

に関する価値観、規範との関連を解明している。出生行動では、人口経済学の効用－コストモデルを手がかりにして、少子化現象が子どもの価値におよぼした影響が注目される。現代では子どもの価値については、子育ての楽しさ、家族の絆の強化、成熟など、情緒的ニーズを充足する心理的効用が優位となったが、他方では、子育ての経済的費用、心理的負担などコストをともなう。また、育児行動を規定するもっとも主要な規範は母性規範である。著者はこれらの概念にもとづき、情緒的ニーズが満たされることで、親としての成長や自己実現を確認していく過程を親の社会化とみなし、大きすぎる心理的負担ゆえに安定感を失い子育ての停滞状態にある場合は、これをマイナスの社会化と定義する。マイナスの社会化は、育児不安に代表される現象であり、母性規範への過度の同調が要因の1つとして考えられている。

第3章、第4章は、子生み・子育て期の男2,143人、女2,282人を対象に2回にわたって大量観察調査をおこなって入手されたデータを検討した実証的考察をおこなっている。3章では、調査対象男女の基本的属性と、おとなの社会化にかかわる関連要因として、性別役割規範意識、地域活動・趣味活動への参加、ライフスタイルが確認されている。

第4章「調査結果の分析と考察」は、出産行動と育児行動の2面から、おとなの社会化を分析している。出生行動では、その時機の選択は性別役割規範や就労に対する女性の意識によって規定されるが、就労継続型の女性では、子産みは機会コストの増大と意識され、そのため親への移行時機を遅らせる傾向にあることがあきらかになった。育児行動については、多数の項目を、規範に対する態度、育児行動における自己社会化、子育ての意味に分けて分析している。女性にかぎって得られた知見をまとめれば、母性規範に対する態度は「自律型」「同調型」「中間型」の3類型に分類できる。自律型は、高学歴や常用雇用の場合で選ばれやすいが、自己評価は必ずしも高くなく心理的負担もより意識されやすい。こうした女性は、伝統的な母性規範によって社会化されなかった存在である。子育ての新しい規範を求めて自ら社会化する過程にあるが、伝統的な母性規範との不一致が葛藤を生んでいる。父親の役割は、扶養重視型と世話重視型に大別でき、役割に対する自己評価は世話重視型や父子交流が頻繁な場合で高くなり、これらの男性で自己社会化が達成できているということがあきらかにされた。

## 審 査 の 要 旨

家族における社会化や親子関係の研究は、大きく3つにまとめられるが、本論文はそれらに大きく貢献を行った独創的な研究である。

第1は、社会化の理論の研究である。その主要な議論は、抽象度がきわめて高い理論的枠組みの試作が多く、おとなの社会化の内容や過程を分析する理論枠組として、ライフサイクルの段階別に区分したモデルの提示や、子どもの社会化との差異の説明をおこなってきた。そうした作業は子どもの社会化に傾きがちな実証的研究に、新しい視点を示すものであった。しかし、子生み・子育て期に限定して実証的に考察したこの作品は、社会化の内容と過程は、諸理論が示すほど平板なものではな

く、多角的にまた動的に把握すべきことを示唆する。

第2は、家族社会学におけるしつけや親子関係の実証的研究であり、日本ではしつけの担当者、しつけをめぐる価値観、共働き家族における子どもの問題などについて、具体的に多くの知見を産出した。ただし、そこでは親を社会化の主体、子どもをその客体として位置づけることが暗黙に了解され続け、親の社会化の視点は欠落している。このため親子関係については、理論研究、実証研究のいずれにおいても、親と未成年子の関係のみが扱われ、成人子と親を含めた考察は皆無に等しい。相互性の概念にもとづいて親の社会化を実証的に研究した本論文は、家族社会学に存在する暗黙の了解に対する大きなアンチ・テーゼを表明し、親子関係研究の停滞をうち破るものである。

第3に、フェミニズム社会学は、社会化の担当者を女性のみに固定する社会装置を理論的に解明するため母性イデオロギー、家父長制、資本制の概念を生み出した。これらの概念による現状分析と歴史的考察は、社会化における男女の不均等を説明することに成功した。しかし一方で、子生み・子育ての固定化が女性にもたらすネガティブな側面が強調されすぎた結果、現実から遊離して実証的研究の能力を低下させている一面もある。本論文は、子生み・子育てが男女の成熟の契機になることを整理・分析することで、そのポジティブな側面の再検討に活力を与えよう。

しかしながら、本論文が社会学の学術論文として最高の完成度に達しているとは、いうことができない。著者自身が認めるように、各ライフサイクル段階と社会化の特質にかんする理論的考察がやや不十分である。また、理論的概念を実証研究に応用する方法の工夫、とくに準備された概念の関連性を考察するとともに、効果的につかう工夫の必要がある。さらには、章によって記述・分析の精粗の差があるところも批判的検討の対象となろう。しかし、これらは、本論文の学術的達成の大きさと比べれば、許容範囲におさまる小さなものでしかない。これらを修正するとともに、さらには日本社会と韓国社会の比較研究にもとづき、親の社会化に対する文化の影響も考察されることを期待する。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するのものと認める。